



夕刊

発行所 中日新聞社  
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号  
〒460-8511 電話 052(201)8811

紙つて

ほとんど大学に住んでいるような毎日だが、英国のロイヤルウエディングの生中継は自宅で見えた。ウエストミンスター寺院の内部が映り、伝統に基づいたセレモニーが粛々と行われている。ふと、ここにはダーウィンが埋葬されていることを思い出した。

もし、ダーウィンとメンデルが会っていたら、科学史は変わっただろうか。そんなことが頭に浮かぶ。

ダーウィンの進化論は画期的だったが、当時定説だった遺伝融合説とは矛盾した。この説によれば、遺伝するものは絵の具のように混じる。赤花と白花のかけ合わせから、ピンクの花が生まれ、いったんピンクになった花からは、赤や白の花は出てこない。

縁は異なるもの？

森 郁恵

一八〇九年に英国でダーウィンが生まれ、十三年後に今のチェコでメンデルは生まれた。修道士となり、修道院でエンドウマメの遺伝実験をした。そして、遺伝するものは混じらないことを発見。いわゆる「分離の法則」だ。

ダーウィンは存命中から偉大な学者と認められていた。だが、遺伝融合説の呪縛から逃れられず、進化論との矛盾に悩んだ。メンデルは物理学や数学の素養から周到で緻密な実験を実践し、結論を導いてみせた。生物学を単なる博物学から脱皮させ、近代科学の一大分野にした功績は大きい。いつか私の時代が来ると言い残し、一生を終えた。

メンデルが予言した遺伝するものの正体がDNAと証明されたのは、一九四〇年代に入ってからである。(名古屋大教授)

2011.5.6

2011.5.6. 1面 No.16